

絹産業は日本経済に好景気をもたらし、対外貿易で日本に近代化の道を開いた。1863年、シルク関連製品が日本の輸出の80%以上を占めた。しかし残念ながら生産者が量に重点を置くにつれ日本のシルクの品質は低下し、絹製品は企業によって大きく異なり、外国の商人は日本の絹を高品質とは考えないようになってしまった。明治政府は、外貨の流れをより確実に増やすため、大蔵省の役人である渋沢栄一(1840-1931)に群馬県富岡市に製糸場を建設するよう頼んだ。

横浜のシルクの検査技師をしていたポール・ブリューナ(1840-1908)は、渋沢の推奨によって、政府のアドバイザーとなった。政府は彼に依頼して、フランス製の製糸器械と蒸気機関を輸入した。製糸場は1872年に完成し、日本とフランスの建築が融合され建てられた。渋沢は新しい製糸場のマネージャーとして従兄の尾高惇忠(1830-1901)を雇い、ポール・ブリューナは工場のオペレーション責任者として4年間勤めた後、フランスに戻った。

当初、工場に労働者を連れて来るのは難しかったため、惇忠は最初の日本人女性労働者として自分の娘を雇った。まもなくして、この製糸場は日本のシルク生産の中心地となり、日本の他の地方に対し、西洋と日本のシルク生産を統合した新しいタイプの製糸場のモデルとなった。1893年に工場は民営化され、1987年まで稼働を続けた。2014年、ユネスコの世界遺産に登録された。